東北交流団新聞

H27
8/24～8/26

東北交流団とは？

東日本大震災後に、名古屋市と陸前高田との間でできた「絆協定」から始まった活動で、今年で3回目です。内容は、名古屋市の中学生の中の代表が、東北の陸前高田に訪問したり、陸前高田の人を名古屋に呼んで食事会をしたりしています。僕が陸前高田に行って気付いた事、話してもらった事は、まとめて三つあります。

『苦しい時は友達を作って助け合おう』

これは、陸前高田の市長さんがおっしゃった言葉です。市長さん自身も津波で奥さんを亡くして辛い中、市長として市民の対応などに追われている時気付いた言葉だそうです。苦しい時は一人でためこまずに友達に話すことで楽になれるし、助け合う事もできるとおっしゃっていました。そうすることで肩の荷が下り深く考える事がなくなっていったそうです。ですがそんな市長さんや市役所で働く人は、今でも仮設の市役所で仕事をしています。市役所が仮設でなくなるのは全ての家屋の復興が終わってからだそうです。

『元気お届け隊』

陸前高田に行って特に驚いたのは、陸前高田の中学生の震災後の活動の活発さでした。どの中学校でもいろいろな活動で、仮設住宅の人々に「元気」を与えられるようなイベントが多くありました。仮設住宅の中の花だんに☺のような笑顔の形に花を植えたり、仮設住宅の人たちに年賀状やカレンダーを送ったり、していました。他にも、自分達を「元気お届け隊」と称してもちつき大会などのイベントを企画し、仮設住宅の人に「元気」を与えていました。

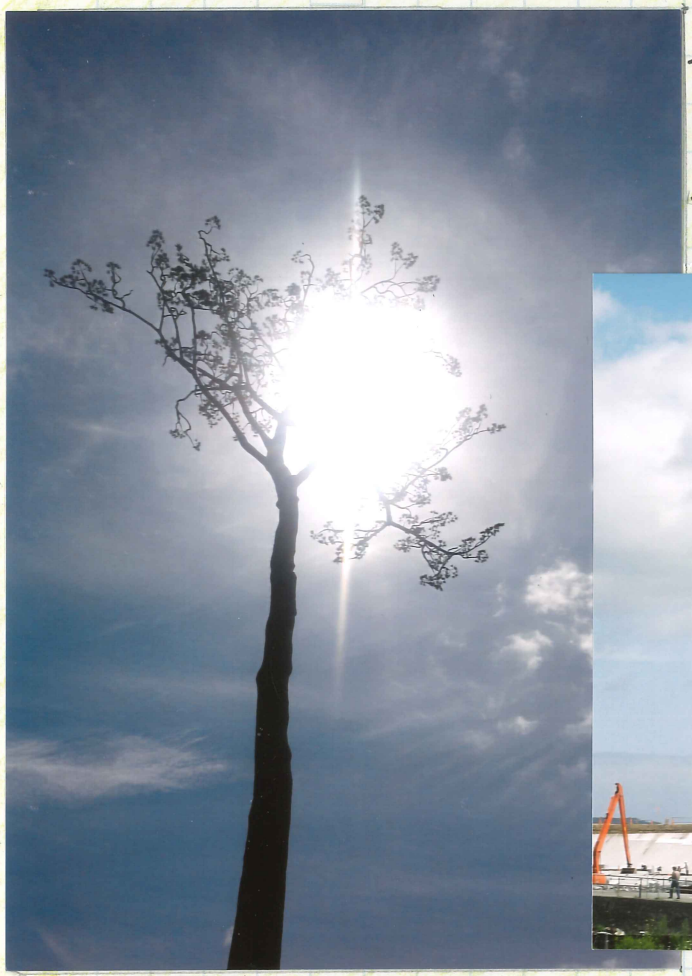
①陸前高田市内の仮設住宅

陸前高田の中学生も辛いのに、人の事を考え、行動しているのは本当にすごい事だなぁと思いました。

『津波が山を越えた』

三日目には、脇ノ沢漁港に行きました。そこではカキ養殖をしている漁師さんの話を聞きました。そこでは津波が来た時の詳しい話を聞きました。津波が来た時には家族と海から遠くではなく、少しでも、高い方へと逃げ難を逃れたそうです。その時見た津波は「壁」のようだったと言っていました。

震災後の日々はとても辛い日々だったと言っていました。家族の安否は全く分からずうわさで聞いた時も、あったそうです。海から助けを呼ぶ声がしても助けに行けず、苦しんだと言っていました。ですがそんな中でも壊れたカキいかだをもう一度作ろうとボランティアや市民で協力して作った四百七十個のカキいかだは、今でも大事に使っているそうです。他にも家にあった米で、近隣の人とご飯を食べたり助け合い協力する中で外に行き、働いていると自然と心も明るくなっていったそうです。



① 復興のシンボル「一本松」

陸前高田に行って

僕にとって陸前高田で過ごした三日間にとても充実していてそれに多くの事に気付き、学べた時間でした。陸前高田でたくさんの中学生の人が多くの人達を元気付けていて本当にすごいと刺激を受け、自分に出来る事は、何だろうと考えた結果、陸前高田に行き、聞いたり気付いたりした事を広く伝えていく事だと思いました。これからもいろいろな方法を使って多くの人に陸前高田や東北についての事を広めたいと思いました。これを見た事で陸前高田や東北の状況に関心を持ってくれる人が増えていってほしいです。